



236号

2018 / 9 / 1

日中文化交流市民サークル‘わんりい’

〒195-0055 町田市三輪緑山2-18-19 寺西方

☎044-986-4195

<http://wanli-san.com/>

Eメール:t_taizan@yahoo.co.jp



石渠の食堂にて 四川省丹巴にお住まいの大川健三さんに連れられて、青海省辺境にある黄河源流を目指していました。道中、昼食のため奥地の街「石渠(せききょ)」の食堂に寄りました。そこで見かけた若い女性二人のうちの一。人なつっこい笑顔が印象的でした。

(2018年7月、四川省カンゼ・チベット族自治州石渠にて 佐々木健之撮影)

春秋時代、孔子は弟子を取り、家で学校を開きました。名声は遠くまで聞こえ、魯の定公の注目をひきました。定公は、度々孔子を宮殿に招き、話を聞きました。

ある時、魯の国の有力者である季孫氏の執事陽虎が、孔子に会いたいと訪ねて来ましたが、孔子は忙しくて面会の時間が取れないと言われ、会うことが出来ませんでした。陽虎は気にせず、又何日かして孔子を訪問しました。今回もまた孔子には面会出来ませんでした。お土産として、孔子に仔豚の丸焼きを贈って帰って来ました。陽虎は、孔子が礼儀には厳格な人で、“礼は往来を尊ぶ”ということを知っていて、必ずお返しがあると考えたのです。果たして、後日、孔子は陽虎の家を返礼訪問したのです。



言葉の意味：礼＝礼儀；尚＝尊ぶ、大切に。礼儀としては、訪問を受けたら、お返しに訪問しなければならない。現代は、何かしてもらったら、その相手には、同じようにしてお返しをするのが礼儀だ、という意味。

使用例：明明が絵を贈ってくれたので、礼儀として、自分の一番好きなおもちゃをあげた。



お話はこれだけです。儒教の特色である礼儀を重んじることを教えるのに、このお話を持って来たのは面白いですね。この年齢の子供たちに、背後の歴史を教えるかどうかは不明ですが、ここではちょっと覗いてみましょう。

実は、この話の中の、孔子が会えないところで「借故」という言葉を使っています。中国語では、「口実を作って」という意味があります。孔子が口実を設けて面会を避けた陽虎とは、どういう人でしょうか。

孔子の生きた時代、魯の国では、魯の王様よりも三桓と言われる、3人の大臣の家が力を持っていました。

この三桓というのは、魯の15代桓公の3人の子供から起こった家で、代々国王の補佐役を務めているのですが、孔子の生きた時代になると、三家とも、その権勢は魯公よりも強くなりました。

孔子が理想とする、周王朝から伝わる礼は、人々が分を弁えて行動することを教えているのですが、三桓家は皆、宴会や楽団の規模で王家をしのぎ、その分を超えた行いを、孔子は苦々しく思っていました。

この三桓の筆頭が季孫家で、陽虎はその季孫氏の支配人として働いていたのですから、孔子が面会したくないと思うのは尤もです。

しかしこの後に面白い話があります。断片的な話ですが、一時期、孔子が陽虎に協力する気になったのです。実現はしませんでした。陽虎はB.C.502年に三桓の家臣たちを束ねて、三桓家に反旗を掲げて失敗し、追放されています。

この二つの話から、私は、陽虎のクーデターは、三桓家を討

って、魯の昭公の支配権を回復しようとしたのだと考えてみました。そうすれば、孔子が協力する気になることも頷けます。陽虎は、放浪の果てに、周囲の反対を押し切って召し抱えてくれた晋の趙鞅のために死力を尽くしたという話も、彼が礼を重んじる人だとの傍証になるのでは、と考えます。

でも、これは私の勝手な想像です。一般的な陽虎の評価は、単なる野心家。クーデターも自分の権勢欲の為だけの単なる下克上だというのが定説です。

ちょっとした歴史の隙間に、想像力を挟んでみるのは、素人が歴史を眺める時の楽しみです。中国の古代史には、こんな隙間が沢山あります。

因みに、この陽虎、容貌が孔子とよく似ていて、放浪中に一度、孔子が命の危険を感じたことがあるのは、陽虎に恨みを持つ人々が、陽虎と間違えて襲ったためだとの話が伝わっています。



満柏氏画

Wú suǒ qǔ cái
无所取材ざい
材を取る所無し〈公冶長第五〉うえだ あつ お
桜美林大学名誉教授 / 孔子学院講師 植田渥雄

孔子は生涯を通じて自己の信念を曲げなかった人です。「吾が道は一以て之を貫く」〈里仁第四〉という言葉がそれを端的に示しています。しかし一方、ひたすらただ頑固一徹であったかという、必ずしもそうではありません。時として本音とも弱音ともつかぬ言葉をポロリと漏らすことがあったようで、それが『論語』のあちこちに見られます。以下もその一例です。ある時、孔子は子路に向かってこう言いました。

「道不行，乗桴浮于海。从我者其由与？(Dào bù xíng, chéng fú fú yú hǎi. Cóng wǒ zhě qí yóu yú?)」(道行われず。桴に乗って海に浮かばん。我に従う者は其れ由か)〈公冶長第五〉。世に道義が行われなくなってしまった。もはやどうにもならない。桴にでも乗って海に浮かびたいものだ。私に付いて来てくれるのは子路かな？と。由とは子路の本名です。「桴」とは小さな筏のことです。「海に浮かぶ」とは俗世間を離れて世捨て人になることを暗に仄めかしているのでしょうか。

孔子は常日頃から隠者に強い関心を持っていました。かつて伯夷と叔齊の兄弟は、周の武王が悪逆無道な殷の紂王を滅ぼした時、武力でもって殷を滅ぼした武王に帰順することを拒否しました。そこで節を守って隠者となり、最後は首陽山で餓死しました。孔子が生まれる500年も前のことですが、孔子はこの二人を「賢人なり」「仁を求めて仁を得たり」〈述而第七〉と言って称賛しています。また、孔子と同時代にも、乱れた世に同調できず、世捨て人になる人が数多くいました。こういう隠者たちに対しても、孔子は底分の敬意を払っていました。隠者は世の悪事に染まることなく、常に清廉潔白であったからです。しかし、いったん隠者になってしまえば、世直

しに関わることはできません。世直しに関わる人がいなければ、世の中が良くなるわけがありません。そこで孔子は、一方で隠者たちに心惹かれながらも、やはり世の人と共に生きる以外に道はない、と言って彼らとは一線を画していました。

しかし現実の世は孔子の思いとは逆方向に進むばかりです。ここに至って孔子の心は、秘かに敬愛する隠者の生き方に傾きかけたのかもしれませんが。一方、頭の単純な子路にはそんな孔子の複雑な思いがわかるわけがありません。

文は次のように続いています。「子路聞之喜(Zi lù wén zhī xǐ)」(子路之を聞いて喜ぶ)。今でもそうかもしれませんが、小さな筏で海に浮かぶことは、当時の常識では考えられないことです。しかし勇猛果敢で知られた子路にとっては、敬愛してやまない孔子から、そんな危険な行為の相棒に自分だけが抜擢されたことは、望外の喜びでした。師匠の為ならたとえ火の中水の中、という心意気だったのでしょう。

孔子はかつて子路の無謀な勇敢さを何度もたしなめたことがあります。そのことに孔子はハタと気付きました。「これはいかん」と。そこで次のように締めくくります。「由也、好勇过我！无所取材。(Yóu yě, hào yǒng guò wǒ! Wú suǒ qǔ cái)」(由や、勇を好むこと我に過ぎたり。材を取る所無し)。子路は私以上に勇敢だなあ……。ところで。筏を作る木材はどこにあるというのかね、と。こう言われてみると木材らしきものは見当たらない。さすがの子路も諦めざるを得ません。

かくして、孔子の密やかな心の揺れに気付く人はいませんでした。

(わりい「中国語で読む漢詩の会」講師)

五都市(上海・南通・揚州・鎮江・無錫)周遊(1)

寺西 俊英

5月に、友人から誘いがあった「上海・南通・揚州・鎮江・無錫 歴史名勝、グルメ5日間」のツアーに参加した。日程表を見ると5日間をフルに使うためか、羽田発8時40分発のMU(中国東方航空)756便で行くことになっていた。

5月20日、指定された6時40分の集合時間に間に合わせるため、朝3時半過ぎに起床。同行したKさんの、姪御さんに朝4時40分に自宅まで来ていただき、新百合ヶ丘駅まで送って頂いた。ご迷惑をお掛けしたがKさんと姪御さんのご厚意に甘えることにした。5時15分に同駅を出発するリムジンバスに乗って6時半過ぎに羽田空港の出発ロビーに到着。MU756便は9時に離陸し、上海浦東空港に中国時間10時30分に着陸した。(以下中国時間で表示)つまり時差が1時間あるので2時間30分のフライトである。

上海で旅行社のガイドも加わり総勢15名のツアーとなった。本ツアーはここからすべてバスの旅で、まず長江を渡り南通に着いた後長江に沿って遡り揚州へ、揚州からまた長江を渡り鎮江、無錫そして上海に戻る左廻りのルートである。バスは12時半に出発し一路南通へ。1時間あまり走ったあたりで予定表には記載されてなかったが、「沙溪古鎮」という水郷古鎮

に立ち寄った。上海、蘇州、杭州の周辺には、多くの水郷の町があるが近年外国人観光客が増えている。このエリアは、長江の運ぶ土砂が太古から長い年月堆積して形成されたため水路が網の目状に広がっている。周荘、烏鎮、同里ほど有名ではないが、この古鎮も味わいがあった。水郷は歴史的な建物があるわけでもなく、近代的に整備された町ではないが、生活の匂いが濃厚で昔の田舎のような佇まいが人の気持ちをゆったりさせるのだ。石畳の狭い通りには、あちこちにこの土地独特と思われる昔

風のお菓子やら粽子(ちまき)を売っている。ガイドさんが粽子を買って配ってくれたのでそれを食べながら散策すると、開放感が満たされてくる。

友人とわき道に入ると、掘割に架かった真ん中が高く造られた石橋が見えて来る。このような石橋を見るたびに、よく重みで上の方から崩れて落ちないものだと思う。その下を荷物を積んだ小舟が過ぎ去っていく。橋の石段には老人が腰かけて二胡を弾いていた。この風景は一幅の絵画を見るようでカメラに収めた。老人の足元には瀬戸物の容器が置かれており、中に1元硬貨がたくさん入っていた。私も演奏して頂いたお礼に1元を入れた。舞台上で聞く二胡もいいが、水郷古鎮で聞くのもいいものである。

集合時間が来たので皆バスに乗り出発した。バスの中で人民元に換金したい方は、1万円で520元という説明があり皆さん交換していた。ガイドさんが人民元をたくさん用意していたようだ。一昨年大連に行った時は640元、昨年成都に行った時、530元で毎年のように円安になっている。バスは夕方5時に「南通銀座花園大酒店」に到着した。チェックイン後6時から夕食になった。この旅は「グルメ」もセールスポイントの一つであるが、次から次へと美味しい料理が運ばれて皆さん大満足であった。料理の名前は殆ど分からなかったが、聞いてもよく理解できなかったと思う。

今夜は、遊覧船に乗って市内を流れる「濠河」の兩岸の夜景観光である。濠河観光は街の名物である。游客中心(観光センター)で入手したパンフレットによると国家AAAAA級旅游景区とあり、第1級観光地のお墨付きをもらっている。「濠」の字は守ると言う意味があり、街を守る“お堀”ということのようだ。友人によると、この地域は中国国内で最も完全に保存されている“古代堀”の一つだそうだ。バスから降りて船着



古鎮の石橋で二胡をひく老人



濠河の夜景

き場に係留されている観光船に全員乗り込んだ。船には、専属の女性ガイドが乗っており、肌寒いので暖房が入っていた。つまり、部屋の中から外の景色を見るような造りになっていて、これなら雨の日でも寒い日でも関係なく景色を楽しめる。船は低いエンジン音を響かせながらゆっくりと岸を離れて行った。すぐ、ありとあらゆる色のネオンで彩られたいくつもの建物が次々と目に入ってきて、確かにとても美しい。そのうち「南通電視塔」というテレビ塔が見えてきた。全体が白色で上部にブルーの展望台が造ってある。私は中国各地—例えば北京、ハルピン、大連等たくさんのテレビ塔を見たが、今まで見た中でこの塔が一番美しいと感じた。デザインがスッキリして気品があるのだ。この塔を見ただけでも南通夜景観光にきた価値があるとさえ思った。上海の「東方明珠」は有名であるが、デザインがゴテゴテしていて印象的ではあるものの好きではない。

濠河風景区は、3平方キロ余りの広さであるが遊覧船は約50分かけて掘割を一周して戻ってくる。パンフレットを見ると、掘割の周囲には次に掲げる様に多くの記念館や公園があり、船から眺めることができるものもある。

「中国珠算博物館」、「中国審計博物館」、「南通博物館」、「南通濠河博物館」、「沈寿芸術館」、「南通蘭印花布博物館」等々、そして「南公園」、「南通盆景園」などである。このエリアは、千年以上の歴史と文化と景観が融合している地域なのだそうである。なかでも、目を引くのが「中国審計博物館」と「南通盆景園」である。前者は、審計とは“会計監査”のことであるが、会計監査の博物館は何を展示してあるのか全く想像がつかない。パンフレットには、「会計監査の3000年

以上の発展の経過が展示されている」と中国語で書いてあるがよくわからない。「会計監査」という仕組みを作ったのは世界で中国が初めてだ、と言いたいのかもしれない。私は若いころ簿記を学んだが、その時に先生が、「ルカ・パチョーリというイタリアの数学者が15世紀に複式簿記を体系化し会計の発展に寄与した」と言われたことを思い出すが、会計と会計監査は別物と言いたいのであろうか。白髪三千丈がここでも顔を出している気がする。後者は、盆景とは盆栽のことだが、同じくパンフレットには「全国に知られた500年以上の樹齢の国家級の盆栽」と書いてあるが、日本の盆栽とはどのように異なるのか、中国の盆栽の歴史はいつ頃からなのか、興味深いけどどちらも見学する時間がなかったのが残念である。上海から近い街なのでいつかまた来て見学したい。付言すると、南通市の特産品に蘭印花布がある。これは中国の伝統的な藍染め織物で、衣服、ストール、ハンカチ、傘など色々な用途に使われている。花布に関する歴史を紹介し、製品を展示してあるのが、前記の「南通蘭印花布博物館」であろう。日本にも「蘭印花布」のお店があるそうだ。

ところで船のガイドさんが、中国全土でも有数なハイレベルの学校である「南通中学」がこのエリアにある、と紹介されていた。南通市は、「中国近代化第一城」とも「基礎教育の郷」とも呼ばれている。ネットで見ると、清末に実業家・教育家であった〈張謇〉^{ちようけん}がこの街に全国初の師範学校、紡績学校、刺繍学校、盲学校、気象観測所などを設置し、中国の近代化に貢献したそうである。中国教育界では「高考（6月上旬に行われる全国統一大学入試）の結果は江蘇省を、江蘇省の高考の結果は南通市を見よ」との言葉があるという。高考で江蘇省は全国1位、その江蘇省内で南通市は省都・南京市や揚州、蘇州など相手にせず10年連続で1位なのだ。清華大学、北京大学に多くの合格者を出している。日本では南通市はあまり知られていない都市と思うが、もっと注目されていい都市であろう。中国人にとっては、常識かもしれないが。

最後に「南通市」の名前の由来であるが、ガイドによると「以前、南通市は通州と呼ばれていた。同じ名前の地名がもう一か所あったので、こちらを南通市に改めた」そうだ。

(続く)

▶ 寺の息子として誕生

山形国民新聞は、斎藤秀一を解雇した学校長の不当行為を報道しました。友人の中には、名誉毀損で訴えるようにと勧めてくれる人もいましたが、特に行動に移すということはしませんでした。特高警察にまともな道理など通ることはないだろうと、その本質をしっかりとつかんでいたのです。

秀一は鶴岡市を出ることなく、読書と執筆中心の生活になりました。庄内方言の研究に力を注ぎ、「庄内方言の特徴」などの論文を書き、東京の言語関係の雑誌に送り、原稿料を手に入れますが生活を賄うほどではありません。「アカ」のレッテルを張られた秀一を採用してくれるところなどはありません。父親とも相談しましたが、仮にあったとしても小学校の教員しかない現状です。秀一は「そういう仕事はどうも好きになれないし、さればといってほかにふさわしい仕事など一つもない」、と当時の気持ちを日記に書いています。

秀一にはいつも監視の目が注がれていました。そして最初の逮捕から二か月目の1932(昭和7)年11月、二度目の検挙です。罪状は、プロレタリア作家同盟山形支部準備会鶴岡地区委員会に出入りしたこと。そしてその組織部長兼教育部長に推薦された、というようなものでした。拘束は短いものでしたが、12月には「赤旗」「無産青年」などの左翼文書配布ということで三度目の逮捕となりました。

▶ 寺の息子として誕生

その年、日本は中国東北部に、傀儡国家「満洲国」をでっち上げました。

中国への侵略を批判する者を治安維持法で弾圧し、共産主義者はもとより自由主義者と呼ばれる人々まで検挙されるような時代になったのです。ヨーロッパではドイツでヒトラーが権力を握りつつあ

り、ユダヤ人への迫害が進行していました。

翌1933年2月、プロレタリア作家・小林多喜二が虐殺され、6月には、日本共産党の中心人物だった佐野学と鍋山貞親が転向した、という記事が各紙に大きく出ました。

そのような中、秀一は『文字と言語』第7号に、「満洲国に於けるローマ字化の一般的方針」という論文を発表しています。当時の中国の全人口4億3千万の約80%に当たる3億5千万人の文盲の原因は、中国語が象形文字のため非常に難しく、それを学ぶ暇と金のある金持ちにのみ都合のいい文字であることを理由の一つに挙げ、こう論じています。

「支那民族にとって、ローマ字化をすすめることは、四億の民衆の民族解放の一つの手段として、支那民族全体が大きな関心をもつべき事項でなければならない」(筆者注：当時は支那語、支那民族は差別語ではなく、中国の人々も支那ということばを使っていた)。

中国では、抗日戦争を闘う文学者の間で、「国防文学論争」というものが起こりました。周揚たちは“国防文学”を、魯迅らは“民族革命戦争の大衆文学”を、という二つのスローガンの下、論争が巻き起こりました。

「国防文学」運動は、ローマ字化と結びつけて闘われていました。秀一は1937

年3月発行の『中国文学月報』第14号に次のような文章を発表しています。

「雑誌やピラで大衆に訴えてみたところで、国民の80%が明き盲の中国では、容易に反響がおこらない。魯迅氏はかつて、“中国には文字が全くないに等しい”という名言を吐いたが、80%の大衆のために書かれた文章が、僅か20%の知識分子にしか理解されないという大きな矛盾が生まれる。そこでは、大衆に文字を知らせることが国防運動の第一の任務になる」。

第26回 最後まで戦った斎藤秀一
ジャーナリスト、方正友好交流の会事務局長、著書『ある華僑の戦後日中関係史』

大類 善啓(おおい よしひろ)

秀一は、中国の民衆が抗日戦争を闘うためには、文字を普及し社会を正しく認識する文化的な力の重要性を明らかにし、『支那語ローマ字化の理論』を中国エスペラント運動の中心人物である葉籟子や魯迅にも郵送しています。ちなみに葉籟子は、後に中国科学院文字改革委員長になっています。魯迅はしっかりと1936年8月8日の日記に「斎藤秀一『支那語ローマ字化の理論』二冊郵送してくる」と記しています。

また秀一は、上海世界語者協会の機関誌「ラ・モヴァード」に、「日本のローマ字運動史」という論文も書いてもいます。

➤ 日中は全面戦争へ

1937年7月7日、蘆溝橋事件が勃発します。近衛首相は“不拡大方針”を発表しますが、関東軍は意に介さず、日本はどんどん兵を送り込み、中国を侵略し全面戦争へ突き進んでいきました。そのような時代、秀一は山形県庄内平野の一隅から、中国の言語学者や作家らと交流を進めていたのです。

1938年、秀一は「ローマ字ニュース」に、「今、世の中では国粋主義が幅を利かせているが、外国のこともよい所はこれを採り、たとえ外国人とでも同じ目的をもつ場合は、これと手をつなぐという大国民的態度がいずれの世にも望ましくはないだろうか」と書きました。

中国への侵略戦争を突き進むなか、日本は“大和民族”の優越性を声高に主張し、国体の神聖化を訴えていた時代です。排外的なナショナリズムがますます進行するなかであって秀一の著作活動は大きな意味があったでしょう。

朝鮮を併合し台湾を植民地にした天皇制日本国家は人々に日本語を強制し、朝鮮語や台湾語などの使用を禁じていた時代です。エスペラントに共鳴していた秀一はもちろん、それぞれの民族語の価値を認めていましたので日本政府の言語政策を受け入れることはできませんでした。

➤ ザメンホフの理想実現へ

そして1937年6月、秀一は全文エスペラントの雑誌『ラティニーゴ』を創刊しました。ラティニーゴ(LATINIGO)とはエスペラント語で「ローマ字化」と

いう意味です。その年の3月、『文字と言語』第11号に次のような文章を発表しています。

「ローマ字運動の国際戦線を打ち立て、それぞれの国に於ける理論と運動の経験とを交換するために、新しい雑誌「LATINIGO」を5月に創刊します。既に支那・ソビエト同盟・シヤムの仲間から執筆の承諾を得ています。あなたも外国の仲間にしらせたいこと何でも書いてドシドシ送ってください。使う言葉はエスペラントです」。

日本のエスペラント界は、プロレタリア・エスペラント同盟と日本エスペラント学会に大きく二分されていました。エスペラント学会の機関誌には「皇紀二千六百年」「東亜の指導者日本」など国策に沿い、“聖戦”の一翼を担うような動きが起こっていました。

秀一は、日本エスペラント学会に入りませんでした。そして1938年、治安維持法違反で5回目の検挙を受け逮捕されました。

孤独な厳しい監獄のなかでも秀一は、抵抗の心情を短歌にしましたが、獄中で肺結核になったのです。1940年4月に釈放されますが、9月腹膜炎を併発し自宅で亡くなりました。

高杉一郎は戦後、「日中エスペラント交流史の試み」(『文学』(1966年3月号、岩波書店)のなかで、「文盲を一掃すべきであるとした中国のラテン化運動を、日本のエスペラント運動のなかに、ほとんど完全な形で反映していた。この目だため地方のエスペランティストがじつにねばり強い活動をつづけていたことを私がはじめて知ったのは、1960年に北京を訪れて、葉籟子と雑談しているときだった」と書いています。秀一の名前と功績は、戦後になっても中国で生きていたのです。

また小林司は1993年の「ラ・モヴァード」誌に、「エスペラント運動と斎藤秀一」と題してこう書いています。「秀一は諸民族の間の友愛と正義というザメンホフの理想を忠実に実践したという点では、最も正当なエスペランティストだったといえよう」。

まことに貴重なエスペラント界の人材でした。

この項は主に佐藤治助著『吹雪く野づらに 一エスペランティスト斎藤秀一の生涯』に負っています。

▶ 初めての地、リスボン

なんとか週に一度は先生について初級読本の学習に励んでいても、遅々としてエスペラントの進歩が自分の中では感じられません。しかし時々、「おや、少しは進歩したかな」と思うこともあるのです。

エスペラント世界大会に一度は参加したい。しかし語学レベルは初心者(Komencanto)で「エスペラントは話せないし、聞いてもわからないしなあ」と思い、なかなか腰があがりません。それでも昨年はソウルで世界大会があると聞いて参加しようかと思いましたが、結果的には参加しませんでした。ソウルは仕事で5、6度は行ったことがあり、新鮮味が感じられなかったのです。

しかし今年は、ポルトガルの首都リスボンでの第103回世界大会です。エスペラントが喋れるようになってから参加しようと思っていたら、「いつまで経っても参加できませんよ。参加してだんだんと話せるようになるんです」という先輩の声。それに、「まず世界大会を体験してみなきゃ」という友人の声に押されて、参加してみようと考えました。また、リスボンというのは一度も足を踏み入れたことはなく新鮮味もありました。リスボンなんてこういう機会でしか行くこともないのではないか、ということもありました。

ということで初めて世界大会に参加したのです。

海外で開催されるエスペラントの会合はいくつもあります。最大の世界大会は、世界エスペラント協会(UER)が主催する世界大会です。その大会にはたくさんの分科会があり、言ってみれば文化祭、大学祭を想像していただければと思います。

その分科会の一つに初心者に教えるクラスがある、というのです。そこへ入れば「同じ初心者同士、仲良くなれますよ」という声も聞こえてきて、まずこ

れに参加しようと思いました。

▶ ドバイ経由でリスボンへ

日本から行く多くのエスペランティストは、一般財団法人日本エスペラント協会主催のツアーがあり、それはアムステルダム経由でリスボンへ入ります。しかし旅費が高い、というので前々から親しくしている田平正子さんから「安いルートがあるんですよ」と言われていました。

田平正子さんは京都市在住の大ベテランのエスペランティスト。アフリカでのエスペラントの会合にも夫の稔さんと参加するほどの女性です。私が40年ぶりにエスペラントを再開して出会った方ですが、なかなかユニークなご婦人で、もう30回近く世界大会に参加している方であり、世界大会やアジア大会にいつも参加しています。今回は英語教師の稔さんとの参加です。年齢はご本人も公言していますから、公表していいでしょう。70代半ばですが、実にエネルギーにエスペラント活動をしている方なのです。

私が正子さんに、「おんぶしてもらって大会に参加しますから、よろしく」とメールを送ると、「お互いにおんぶし合っちゃいましょう」と返事をくれる方でもあります。正子さんがいるからこそ、私も大船に乗ったような気分になれました。

正子さんの言う安いルートは、ドバイ共和国の飛行機でドバイ経由のリスボン行きです。京都からは田平夫妻、それに私とほぼ同世代の木元靖浩さん、関西人特有の味わい深いユーモアのある男性、それに若い宮澤賢治研究家の富田成美さんの4人が関西空港から出発。私は成田空港から出発してドバイで落ち合うことになりました。

▶ さわやかなリスボン

7月26日(木) 午後10時、成田を出発、翌日

混迷の時代を拓くザメンホフの人類主義「私は人類の一員だ！」
第27回 エスペラント世界大会に初参加(Ⅰ)
ジャーナリスト、方正友好交流の会事務局長、著書『ある華僑の戦後日中関係史』
大類 善啓(おおるい よしひろ)

27日(金)現地時間の3時40分、ドバイ空港に到着。そうして京都からの4人と落ち合い、7時25分ドバイを出発、12時35分リスボンに予定通り到着しました。

リスボン空港から我々が泊まるホテル、VIP Inn Bernaへ地下鉄で行きました。これ以後、リスボンではほとんど地下鉄を使って行動しました。

旅装を解き、一休み。その後、ホテルの周囲を仲間と歩きながら、夕食を取るべくレストランを探しました。周囲はテラス風の店で軽食以外にはありません。そうして歩いていると、アジア系の褐色肌の青年がうちの店に来ないかと誘いました。他に入りたいような店もなく、結果的にその店に入りました。

ネパール人たちが経営する店でした。東京でもネパール人たちは活躍しています。東京のインド料理屋はほとんど、八割はネパール人が経営者だとか。ネパールはヒンズー教文化圏でもあり、ネパール料理と言ってもその主流はインド料理なのでしょう。それにしてもヨーロッパの西の果て、リスボンにまで進出するネパール人のたくましさには大したものだと思います。

その夜、一眠りしたら、足がつってきました。東京でも歩き過ぎたり、疲れた時などたまに足がつりますが、左足が多く、たまに右足がつることはあっても、両足がつるということはまずありません。ところが両足の脛のところが同じようにつるので、参ってしまいました。ひとりで寝ているので大きな声を挙げてもいいのですが、両足をつっていて大きな声をあげられません。すぐにエコノミー症候群だと思いました。

二日がかりのエコノミークラスでの機内。ほとんど足をリラックスすることもなく、まさか両足同時につるなんてと思いつつ、ひとり足をマッサージしてやっと痛みは治まりました。それ以後気がつけば、ふくらはぎをマッサージしました。それもあってか、以後まったくつることはありませんでした。

▶ ビザが下りなかったパキスタン人

翌日、大会初日の会場、まず受付を済ませ、「KONGRESA LIBRO」という大会の概要、分科会

の内容や日程などを詳しく紹介した130頁ほどの冊子を受け取りました。事前に正子さんから、ある程度内容を聞いていたこともありましたが、改めて参加したい分科会などをチェックしました。まず初心者のための講習会が、大会3日目の7月30日(月)から毎日2時間近く、5日目の8月3日(金)まで7回ほどありました。私は関心のある他の分科会に参加したいので、結果的に二日間、計4時間ほどしか出席しませんでした。

今回、分科会にスーフイズムについての会があるのを知り、興奮しました。スーフイズムというのは簡単に言えば、イスラムの神秘主義というものです。

現代バレエの振り付け師、演出家として有名なモーリス・ベジャールに関心をもっていた私は、彼の思想遍歴に触れ、マルクス主義からいろいろ変転したあげく、最終的にベジャールはスーフイズムに行き着いたということを知り、いたく興味を持ったという実に簡単な理由です。

日本語に訳されたスーフイズムに関する書籍を二冊ほど持っており、読んだことはありますが、とりわけ頭に入っているわけではありません。それがここリスボンでの分科会で45分ほど講義があるというので驚きました。今回リスボンにやってきた甲斐があったものと期待に胸ふくらませ、8月3日(金)午前9時にその部屋に行きました。20人ほどの人が集まりました。

ところが司会者が、話すべき人がパキスタンから来る予定だったが、ビザが取れず、リスボンに来れなかったというのです。仮に、彼がエスペラントで話しても、私の語学レベルでは理解はほど遠いでしょう。ちゃんと日本語での著作を読んだ方が理解が深まるということがわかっていても、本当にかっかりしました。ビザが取れなかった理由はわかりませんが、近年のイスラム過激派への警戒がこんなところに出ているのではないか、などと私は勝手に想像したりしました。

真相が那邊にあるかわかりませんが、どこの国に行こうがほとんどノービザで出かけられる日本国籍者にとっては少しばかり驚きの一幕でした。(続く)

東西文明の比較 (27)

▼「隋・唐と日本」おさらい▲

陽光新聞社・顧問 塩澤宏宣

589年、中国では、後漢末期から4世紀あまり続いた分裂による動乱を収め、隋朝を築きました。この頃の日本では、聖徳太子が摂政についており、政治改革に取り組んでいました。

日本史で言えば飛鳥時代(592～710)です。そして、隣国の先進文化を直接取り入れるために、相次いで4回の遣隋使を派遣しました。600年、607年、608年、614年です。この遣隋使派遣は、隋と倭(日本)という2つの統一国家が正式な国交を開始したこととして大きな意味を持ちました。

614年、唐が隋を滅ぼして、長安に都を置きました。唐の経済・文化は、空前の繁栄を見せ、東アジア最強の帝国になりました。倭では、過去4回に及び遣隋使を通じて中国文化に傾倒して、中国文化の「模倣」の潮流が生まれました。623年に隋への留学僧の恵齊、恵日等が長い留学から帰国し、天皇に「唐が法律制度が最も整った国」であることを報告しました。

その報告を受け、舒明天皇は、630年に第1回の遣唐使派遣をします。630～895年の260余年の間、飛鳥・奈良・平安の3時代にわたる「東西文明の交流」が始まったのです。「遣唐使」という呼び名は、当初は「西海使」、「入唐使」「聘唐使」などと呼ばれていました。それが「遣唐使」となるには理由がありました。当時、唐に使節を派遣した国は、新羅などの韓半島諸国以外に数多くありました。倭と唐は、それらと区別するために「遣唐使」としたのです。この名称は、現在でも日中間で定着しています。

19回続いた遣唐使派遣

遣唐使派遣は、記録的には19回です。しかし、色々な問題があって、実際に派遣できた遣唐使は、

わずかに12回でした。理由は、任命後に何らかの理由で行かなかったのが3回、朝鮮半島の百済に阻まれたのが1回、唐朝からの使節を送り返す「送唐客使」が2回、そしてもう1回は、入唐して久しいのに帰れない人々を特別に迎えに行く「迎入唐使」でした。

目的が異なった3つの時期

200余年という長い年月では、「一定」という概念は当てはまりません。倭にも唐にも、国の内外では多くの変化がありました。そこで、この200余年を3つの時期に分けて考える事が定着しています。

初期：630～669年。目的は唐朝の制度を学ぶこと。使節団の規模は小さく、船は1～2艘。随員は100～200人程度。航路は朝鮮半島を沿うルート。

中期：702～752年。飛鳥末期から奈良時代中期。遣唐使の最盛期。任命し実現したのは4回。使節団の規模は大きく、使節団は毎回500人を超え、船も4艘だった。盛唐の文化を本格的に吸収し、多くの留学生や留学僧の滞在期間は長くなる。その効果は「奈良文化」に影響を与えた。航路の多くは南方諸島を通る南島ルート。

後期：759～874年。奈良時代後期から平安時代中期。衰退期である。9回任命されたが、実現したのはわずか6回。唐は安史の乱により国力が衰退し始めており、日本にも唐から学ぶものは無くなった、という雰囲気が充満した。

最優秀な人材を派遣

使節団は、大使、副使、判官、録事などの官僚の他に、医者、通訳、画家、楽師、職人などの各種随員がおり、それらに船乗りもいました。これらの使臣は、古典や歴史に精通し、才能溢れ、漢学の教養が高い一流名人材が選ばれました。留学生や留学僧も留学前に国内で頭角を顕している人も居り、唐から帰国するとほとんどが名を成しました。

遣唐使の功績

その第一は、典礼制度を導入し、日本の社会制度を作り上げたことではないでしょうか。唐の律令を

規範制度としたこと。更に、教育制度を導入して各種学校を開設し、漢学を教えて人材育成に貢献しました。暦法、礼節、風習までも学びました。

次には、日本の文化芸術のレベルアップです。遣唐使は、毎回大量の漢籍、仏典などを携えて帰国しました。日本人たちは、競ってそれらの書物を読み書きして実力を磨きました。白居易など、唐代の著名な詩人の詩集が日本全土に広がりました。カタカナを作り出したのも留学僧たちでした。

また遣唐使は、書道・絵画・彫刻・音楽・舞踊などの芸術を持ち帰りました。将棋・碁等の技芸、相撲や馬球(ポロ)等のスポーツも持ち帰りました。

都市の建設

奈良は、日本仏教の中心であり、文化の発祥地です。平城京は、710年に帰国した遣唐使が、唐の都・長安を真似て平城京として建設しました。その規模は、長安の4分の1です。

日本仏教華嚴宗の総本山である東大寺は、745年創建されました。聖武天皇が、中国の寺院建築を模倣して建立しました。その大仏殿の西にある戒壇院は、唐から来日した鑑真によって建てられました。また正倉院は、当時の天皇の用品、東大寺の寺宝、奈良時代の美術品、中国・ペルシャ・西域などから運ばれた品々 9000点余が納められています。これらの多くは、遣唐使によって持ち帰られたものです。

■ 代表的な仏教建築

- 唐招提寺金堂
- 唐招提寺経蔵
- 薬師寺東塔
- 東大寺法華堂(三月堂)、転害門
- 正倉院宝庫
- 法隆寺東院夢殿

遣唐使の廃止

遣唐使は、895年に廃止になりました。その原因は、唐朝の政局が不安定になったことでもあります。すでに200余年間、唐の文化を吸収し尽くして、日本の改革が完成したこともあるでしょう。

一方では、唐から日本へ貿易に訪れる人々が増え続け、これまで遣唐使に頼っていた唐の物産も、彼らが担ってくれるようになったことも廃止の大きな要因でしょう。

交流を「絶つ」ことで生まれた日本文化

私がここで注目するところは、持ち帰った唐の制度や学問・芸術などを「日本の国情」に合わせて日本独自のものにしたことです。先進国のいいところは学ぶが、それらをそっくり取り入れるのではなく、日本にふさわしく「改善」する努力をしたことです。

「奈良」と「京都」の違いを現代でも感じられます。奈良には、「異国(中国)の香り」が残っているようです。一方で、京都にはそれらが無く、日本独特の「香り」があります。このことは、私の友人である中央テレビ台(CCTV)のディレクターも指摘していました。

その理由として、私の考えがありますが、それは次回に述べたいと思います。

**‘わりい’は、いつでも新入会を歓迎しています。
年度途中からの入会は会費の割引があります。
気楽にお問合せください。**

**年会費(4月～3月): 1500円 入会金なし
郵便局振替口座: 00180-5-134011**

‘わりい’の名は、‘万里’の中国読みから付けられました。文化は万里につながるの想いからです。

主としてアジア各国から来日の方々と協力し、講座、研究会、鑑賞会、展覧会等を開催し、文化的交流によって国や民族を超えた友好を深めたいと願っています。

会員になりますと

- ①年10回(2月・8月を除く)おたよりをお送りします。
- ②‘わりい’の活動の全てに参加できます。

問合せ: 044-986-4195 (寺西)

◆インターネット会員の制度もあります。メールアドレスを頂いた方に、毎月、美しい‘わりい’をPDFカラー版でお送りします。こちらは無料で購読できます。

◆町田市民フォーラム4F・町田国際交流センター、町田生涯学習センター6F、中国文化センター、川崎市国際交流センター、神奈川県立地球市民かながわプラザ・他でご自由に取って頂けます。上記へお問い合わせください。

雨のソウル旅行①(下)

(2018年5月15～19日)

関根 茂子

■5月18日(金) 雨

今日は、韓国山岳会のS姉の友人と地下鉄5号線のクアンナル駅で10時に待ち合わせ、いっしょに山を歩いて浅川巧のお墓まで案内してくれるのだが、山歩きするなら、雨具上下、杖は必携だ。どうするか決めないと荷物が分けられない。さんざん迷ったが雨の山歩きは遠慮したいと「お墓だけに連れて行って」と頼むことにして杖もポットも宿に置いていく荷物に入れて、軽装で待ち合わせのクアンナル駅へ。

1時間も前に到着、広場のベンチで待っているとハイキング姿の年配の男性が次々、上がってくる。なるほどこの駅は軽いハイキング起点駅なのだ。

約束の10時にばっちり登山姿で現れたのは何年前かに白雲台ハイキングでお世話になった韓国山岳会の曹東植(チョ・ドンシク)氏だった。「雨もたいしたことはない。とりあえず峨嵯山(アチャサン)まで往復2時間ぐらいだから行きましょう」と彼に引っぱられて歩き出す。屋並みを縫って15分ほど歩いて行くと登山路の入口、スキー場にある雪を吹き飛ばすエアガンがいくつもある。登山後、靴や服についた土や埃をとるためのものだという。

登山道はなだらかな舗装路続きで小雨でも比較的歩き易い。峨嵯山駅からの登山道を合わせると「峨嵯山は三国時代に高句麗と新羅が戦った古戦場」と記されたハングル、中国語、日本語併記の説明板があった。大きな花崗岩の岩盤が現れ、それを回り込んでいくと水場と休憩所があり、保育園らしき子供の一団と年配の韓国人グループが休んでいた。「日本から来た」と言う韓国人男性がトマトとコーヒーをふるまってくれた。そこから松林の道を行くと高句麗亭なる八角亭が建っている。さらに登り板敷きの展望台に出るも、景色は霞んでいた。

幅広の尾根道をたどる。右下は漢江(ハンガン)だ。筵敷きの登山道を過ぎると第4保塁で、ここが峨嵯山山頂(標高295.7m)とのことだ。階段を下り、次は階段登りで展望テラスに着く。チョさんのザックから出てきたクッキーと温かいお茶でひといき入れ



光化門広場の世宗大王像、背景は北漢山

る。目の高さにさっき歩いた筵の尾根がよく見え、結構歩いてきたと実感。

龍馬山(ヨンマサン)は割愛。雨が強くなったので傘をさして目的の忘憂里公園墓地に急ぐ。そのうち林の中に点在する墓が現れ、50分ほど歩いたあずまやで小休止、墓地公園案内の地図があった。さらに10分できれいに整備された浅川巧の墓に着いた。

通りかかった公園整備の作業車をチョさんが停めて、私たちを下まで乗せてくれるように頼んでくれる。おかげで墓地公園入口まで車なら5分足らず、おおいに助かった。あとは、新興の街中を地下鉄駅まで歩くだけだ。途中の青少年キャンプ施設で彼曰く「自分はマイカーで日本に渡り77日間で100名山を45座、登った。泊まりはほとんど、このようなキャンプだった」に驚嘆。

13:42、下りついた養源(ヤンウォン)は新しい京義中央(キョンイ・チュンアン)線の駅で地下鉄とはいえ高架駅だった。清涼里(チャンニャンニ)で1号線に乗り換え、私たちは鍾路5街で下車、チョさんは「夕食には中途半端な時間だから今日はこれまで」と地下鉄に乗ったまま去っていった。

昨日の市場で海鮮チヂミとネギのパジョを食べ15:30宿に戻って、荷物をまとめて仁川のホテルに向かう。ところがソウル駅で空港鉄道の乗換に地上に出てしまいウロウロ、空港鉄道も直通と普



アチャ山駅からの遊歩道合流点の石碑



おいしかった海鮮チヂミ

通電車の乗り場が違い、切符の自動販売機も別物なのだ。

やっと普通の切符販売機を探し当て、終点の第2ターミナルまで行く。第2ターミナルの案内所でスカイホテルへ迎えの車依頼の電話を入れてもらうと「車には第1ターミナルからでないと乗れない」といわれる。切符を買って、第1ターミナルに戻る、再度、電話しようと案内所を探していると、親切な男性が自分の携帯電話でホテルに通話「10分後に着く。いつもの送迎待ち合わせ場所3階7番出口で待つように」とのことだった。でも1時間たっても、車は来な

い。ターミナル内に戻り、案内所でホテルに電話を入れてホテル着は7時過ぎ。雨は止んでいた。

行きつけの参鶏湯(サムゲタン)専門店で最後の夕食(@13000)後、小型スーパーで韓国海苔を買う。

■5月19日(土) 晴

ホテルに荷を預けて、お土産のトウモロコシ髭茶を買いに大型スーパーへ。10時開店までしばらく待った。空港に送って貰い、豪華な定食の昼をとっても@26000¥の返金があった。仁川15:55発アジア航空便は30分遅れて出発、成田19:00着で無事帰国。(終り)

《'わんりい' 掲示板》

◆わんりいの講座 中国語で読む・漢詩の会

漢詩で磨く中国語の発音！中国語のリズムで読んで漢詩の素晴らしさを味わおう！！

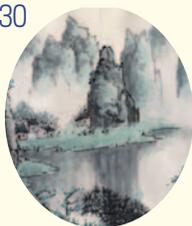
▲まちだ中央公民館 10:00～11:30

9月23日(日) 第3・第4学習室

10月7日(日) 第1学習室

▲講師：植田渥雄先生

(桜美林大学名誉教授、
現桜美林大学孔子学院講師)



▲会費：1500円(会場使用料・講師謝礼など)

▲定員：20名(原則として)

*録音機をお持ちの方はご持参下さい。

◆申込み：☎090-1425-0472(寺西)

E-mail:ukiuki65@yahoo.co.jp(有為楠)

◆わんりいの催し ボイス・トレをして日本の歌を美しく！

あなたも私も笑顔が美しくなる！身体の力を抜いて、気持ちよく発声しよう！！声は健康のバロメーター！気持ち良く歌って毎日元気！

まちだ中央公民館 10:00～11:30

●9月18日(火) } 視聴覚室
●10月30日(火) }

★動きやすい服装でご参加ください

●講師：Emme(歌手)

●会費：1500円(会場使用料・講師謝礼など)

●定員：15名(原則として)

◆申込み：☎042-735-7187(鈴木)

E-mail:wanni@jcom.home.ne.jp(わんりい)



【9月定例会開催日及び10月号'わんりい'発送予定】

◆問合せ：☎044-986-4195(わんりい)

●定例会：9月7日(金)13:30～ 三輪センター・第三会議室 ※定例会は'わんりい'会員の皆さんはどなたでも参加できます。

●10月号'わんりい'発送日:9月30日(日)10:30～ 三輪センター・第二・第三会議室 ※おたより発送日は弁当持参です。

海外出張の思い出 (旧ソ連・ノボロシースク編 ⑦)

高島 敬明

人員が一挙に増え、気候もよくなってくると工事現場の方も騒がしくなってきました。どの会社も少しでも早く仕事を進めたいわけですが、我々の機器のセッティングが終了しないと他業者の仕事は始めることが出来ません。海運省とフランスのUIE社も入っての全体工程調整および日本側内部における業者間の調整が次第に円滑に行かなくなってきました。岸壁の広がったスペースもいろいろな機器、配管、資材などがどんどん持ち込まれ狭くなってきます。大きな機械を設置するわけですが、積木細工のように組み立てる順番があり、間違えると必要な機器が入らなくなってしまいます。折角完成しても再度解体してやり直さなければならなくなります。どの業者も次第に殺気だってきました。いずれにしても当社が中に入り順番を決めなければなりません。そんな中で大きな事故が起きてしまいました。

このところカラッとした好天が続いていました。その日もいい天気でしたがなぜか朝から台風並みの30～40メートルの風が吹き荒れています。エレベーターの周りを鉄骨で組み上げたギャングウェイに取り付けてある日本から持参した“こいのぼり”のシippoが千切れて飛ばされるのが見えます。現地の人のお話では、この風は1日で止まなければ3日、3日で止まなければ1週間、1週間で止まなければ1か月続くと言われていました。黒海はネットで見ると温暖湿潤気候とありますが、その通り黒海は沖合まで荒れていないのです。ノボロシースク湾だけの現象なののでしょうか？カフカス山脈の地形の関係でしょうか？ともかく現場ではクレーンを使う作業はすべてできなくなりました。工程が遅れてくる中、横浜から来た鉄骨業者が困り切っていました。塗装工事を急がないと建て方が出来ないからです。遅れると中の計装電気工事に響くので工程会議では何度も念を押されていました。その業者は悩んだあげく、鉄骨の柱(H鋼)を塗装監督自らクレーンを使いペンキ作業ができるように裏返しにする作業を始めたよ

うです。そして事故は起こったのです。

緊急の連絡がありとにかく現場に急ぎました。説明によると強風であおられ鉄骨が回転し、別の鉄骨との間に監督自ら足を挟まれ、両足とも向う脛の部分を骨折したのです。すぐ寺島さん同道で病院に運び込みましたが、治療は無理なようでただ見守しかありません。本人は、「申し訳ない、申し訳ない」と謝るばかりでした。Yプロマネの判断で、こちらの治療では後遺症の可能性があり担架に寝かせたまま会社の人の帰国に合わせ、社員が付き添って帰すことに決めました。40歳くらいの人でしたが、「こんなことで来たのではない。帰りたくない!」と声を出して泣いていました。皆、我がことのように黙っているばかりでした。

労働者の国ですが、労働基準監督署のようなものは無く、たいした問題にはなりません。日本では一週間は立入禁止になり、責任追及されるでしょう。

ところで、黒海はこの地に来るまでは地図で見たことがあるな、という程度の認識しかありませんでした。すこし解説させていただきますと、——黒海はご存知のようにヨーロッパとアジアの間にある内海で、面積は約436万平方キロメートルもあり日本やドイツもすっぽり入るほど大きいのです。周囲をトルコから時計回りにブルガリア、ルーマニア、ウクライナ、ロシア、ジョージアの6か国に囲まれています。平均水深は1,253mと深く、最深部は2,206m



メーデーの日、海軍省の役人と。中央は監督官、右は著者。



後方の円筒形が流量測定機器。手前の資材が継ぎ手など。

もあります。黒海という名は、黒みを帯びた海水に由来しています。注ぎ込む河川で最大のものは「美しき青きドナウ」で有名なドナウ川です。流れ込む河川の水運、そしてエーゲ海から地中海に繋がっていることから重要な水運の交通路になっています。

大きな事故の発生のかたわら、小さな事故もよく起こります。ある時女性の通訳が現場を見たいと言ってきました。ヘルメットも被らず運動靴のようなものを履いてついてきました。そんな中後ろの方で素っ頓狂な、ギャーギャーという叫び声が出ます。どうしたものかと駆けつけますと、何か水たまりからビリビリ来たと言います。これはすぐ電気だと思いました。前々から気になっていたのですが、溶接用の、故障ばかりするポンコツ発電機の配線の被覆が剥がれ水に触れていたのです。我々は防水・防電の安全靴ですから感じませんでしたが、うら若き日本女性に襲い掛かったのです。早速、寺島さんがレターに書いて「人命に関する重大事項なので是正して欲しい」と申し入れましたが、プライドの高い海運省から「溶接に関し日本人から学ぶことはありません」と頓珍漢な返答が来ました。作業員たちには水に入らないように、との注意で終わりました。

「流量測定機器」のトラックからの落下事故も発生しました。この機器はローディングアームの手前に付ける目玉商品の一つでした。1/100の精度でしたが当時は世界一の機器でした。高さ3メートル、縦横1.5メートルの大きなもので上部において配管と繋がりますので重心が上方にある頭でっかちな商品です。大きな箱に入っていたので運転手が固縛しないで大丈夫だろうと、勝手に判断したようです。港に

入る前のカーブで荷台から落下し、立派な箱は完全に壊れ機器は傷つきました。

立派な箱についてですが、この梱包された箱は開梱後に木材、ビニール、緩衝材など多くの廃棄物が出てきます。最初の頃はこれらをどのように処分すればいいか頭を悩ませましたが、そのうちにすべて解決しました。貨物や荷物は日本での規格に定められた輸出梱包仕様で梱包されます。木材は害虫駆除などを完璧に行った普通の家が建つような立派な木材が使用されていました。中の緩衝材、段ボール、ビニールも一番上質のものが使用されていました。魚心あれば水心で開梱作業がある日は、現場で行列ができるようになりました。人々は開梱した廃材などを欲しがっていたのです。皆、木材やビニールなどを手に持てるだけ持って、車に乗せて大騒ぎではしゃいでいるのです。寺島さんに彼らは何に使うんですか？ と聞きますと、厳しい冬を越すために家や家畜小屋の補修に、ビニールは窓を覆って隙間風が入らなくするためだそうです。

こんなこともありました。相変わらず作業員、クレーンオペレーターの遅刻・欠勤が頻繁に起こります。訳を聞くと決まって、「バスが遅れた、タイヤがパンクした」と毎回毎回同じ言い訳です。海運省に文句を言っても「ヤポニマイ、仕方がない」と素っ気ない返事しか戻ってきません。中には日本人のようなまじめ？ な人もいます。その人たちには明日も現場に来てもらおうと、日本人作業員も我々も気を使っていました。寺島さんからは、「100円ライターとかストッキング、カレンダーなどで機嫌は取らない方がいいですよ」と忠告されました。理由は日本人と仲良くなると、こちらの作業所に割り当てられなくなり、来たくても来なくなりますよ、とのことでした。ある時ソ連人と仲良くなり、コルホーズで取れた小指ほどの小さなイチゴを籠いっぱいにもらったことがありました。お礼にとその人を宿舍のハム焼きパーティーに呼んだことがありましたが、次の日から彼は来なくなりました。ソ連では外人と仲良くなるとは問題になるようです。いつもあからさまに監視されている状況で嫌になります。こんな日々がずっと続くのです。

(続く)

清平調詞 其一、其二

報告：花岡風子

今回のお題は七言絶句二首『清平調詞』其一と同其二でした。作者は李白。唐王朝の最盛期、玄宗皇帝からお題を頂いて即興で作った詩ということです。

さて、李白という詩人は綿州(今の四川省綿陽市)の出身

とされていますが、実際生まれたのは^{スミアブ}稗葉という、今のキルギス共和国の辺りだったのだそうです。異民族の血を受けているという説もあります。

父はシルクロードを往来する行商人でした。母のことはよく分かっていませんが、母が太白星(金星)を踏んで身ごもったとのことで、字を太白と^{あざな}いいます。号は青蓮居士。青少年期には仙人に憧れ、道士の修行をしたり、侠客と交わったりして自由奔放な生活を送っていたようです。25歳にして青雲の志を抱き、三峡を下って中央に出てきました。

李白には、当時の若者たちにとって立身出世の登竜門であった科挙を受けた形跡がありません。一つには受ける気がなかったか、あるいは出自の関係で、然るべき推薦者を得られなかったから、とも言われています。

41歳の時、^{せんちゅう}剡中(今の江蘇省剡県)で^{えん}呉筠という道士に出会い、翌年その道士が玄宗皇帝に招かれて上京。さらにその^{ごいん}呉筠の推薦を経て、玄宗皇帝に見えることになったとも伝えられます。また、742年には、^{が ちしょう}賀知章(659～744)の知遇を得て玄宗に見え、その推挙を受けて翰林供奉となったとも伝えられます。そのとき賀知章が李白のことを「^{たくせん}謫仙人」(天界から追放されて人間界に降りてきた仙人)と言って褒めあげたことは有名な話です。

しかし李白の上京、玄宗との対面の経緯につい

清平調詞 其一

yún xiǎng yī shang huā xiǎng róng
云想衣裳花想容
chūn fēng fú kǎn lù huá nóng
春风拂槛露华浓
ruò fēi qún yù shān tóu jiàn
若非群玉山頭見
huì xiàng yáo tái yuè xià féng
会向瑶台月下逢

雲には衣裳を想い華には容を想う
しゅんぷうかん ほんら 露華濃 やかなり
春風檻を払うて露華濃 やかなり
も ぐんぎょくさんとう に見るに非ずんば
会 ならず 瑶台月下に 向かって 逢わん

ては、諸説が有ってあまりはっきりしません。それはともかくとして道教に並々ならぬ関心を寄せていた玄宗にとって、李白はとても魅力的な人物と映ったようです。

42歳の秋に玄宗皇帝に見えた後、43歳から丸一年程、玄宗の寵愛を得て自由奔放に振舞い、宮廷詩人として大活躍します。「李白一斗詩百篇、^{ちやうあんしじょうしゅ か}長安市上酒家に眠る。天子呼び来れども船に上らず、自ら称す臣は是れ酒中の仙なりと」(『飲中八仙歌』)とは、杜甫が後にその豪遊ぶりを想像しながら詠ったものですが、その李白も44歳の時には追放されてしまいます。

今回の二首はそんな李白を宮廷詩人の地位に押し上げたデビュー作でもあり、その後の失脚の原因にもなったという、いわく付きの作品です。

この詩は七言絶句の形を取っていますが、「清平調」とは楽曲の調子の名称の一つです。「詞」とは、その歌詞のことです。その場で当時の名歌手^{り きねん}李龜年によって、鳴り物入りで賑々しく披露されたものと伝えられています。

意味はこうです。

雲を見れば楊貴妃の美しい衣裳が目にかび、
牡丹の花を見れば楊貴妃の美貌が思い浮かぶ。

春風は沈香亭(玄宗が楊貴妃と牡丹を賞で

た場所)の手すりを吹き抜け
牡丹を濡らす美しい露は艶やかだ。
これほどの美人は、群玉山^{ぐんぎょくさん} 1)のあたりで見
かけるのでなければ、
瑤台^{ようたい} 2)の月明かりの下^{もと}でしかめぐり合えな
いだろう。

さて、この詩を理解するには、詩の主人公である玄宗皇帝と楊貴妃のことも触れなければなりません。楊貴妃、名は玉環^{ぎょくわん}。楊貴妃と言えば日本でも知らない人はいない、中国唐代きっての美女ですね。今年の2月に上映された映画『空海 KU-KAI 美しき王妃の謎』にも二人は華やかさを極めて登場していました。楊貴妃はなんと元々は玄宗皇帝の息子寿王の妃でした。ところがあまりに美しいので、玄宗が横恋慕して取り上げてしまったのです。

直接取り上げるのは流石に物議をかもす、とのことで一旦彼女を道士にして、名前も楊太真^{ようたいしん}と改め、夫である息子から引き離してしまいます。李白が宮廷に入った頃はちょうどそんな頃だったようです。道士にしたとはいえ、堂々と側に侍らせていました。後に還俗させ、貴妃という、皇后に次ぐ位につけます。

「息子の嫁を奪うなんて、親としたら最低ですよねー。まあ、それが権力者というものなのか。普通の男には出来ませんねえ」と植田先生。

楊貴妃は容貌が麗しいばかりでなく、歌や踊りに秀でており、それが芸術好きの玄宗皇帝には魅力だったようです。日夜宴会を催しては、楊貴妃

に歌い舞わせていたのでしょう。そこで、ありきたりの歌でなく、なんとか楊貴妃の美しさを歌った特別な歌を作らせようとのことで、その歌詞を書くように、と李白に命が下されたというわけです。

この時李白はベロベロに泥酔していましたが、酔いの勢いで一気に書き上げたのが、この詩だということです。

玄宗皇帝は日ごろから格別に牡丹を好み、牡丹の花を楊貴妃の美しさと重ね合わせていました。李白はその玄宗の好みを巧みにとらえて、牡丹の花の美しさを歌いながらも楊貴妃の美しさを暗示する。そしてさらに仙界にまで思いを致す。人と花、幻想と現実が交錯した実に見事な出来栄です。「言ってしまうとゴマスリの詩だけど、ここまで来れば芸術になるね」と植田先生。私個人としては、李白のこの詩は見事と言えれば見事だけれど、あまり後味の良さを感じないのが正直なところでは、

次は其二です。この歌は伝説が下敷きになっていますので、それから解説せねばなりません。

昔、楚の国に懐王^{かいおう}という君主がいたのですが、洞庭湖にほど近い高唐^{こうとう}という場所に来た時、ある夢を見ました。夢の中で美しい巫山^{ふざん}の仙女と懇ろになりました。巫山とは仙女が住む山の名です。そして別れ際に仙女が「これから私は朝には雲になり、夕には雨となって貴方に会いに行きます」と言ったところでパッと目が覚めました。

この事があってから懐王は寝ても覚めてもその仙女のことを思い焦がれたけれども、二度と夢で会うことすらできなかったそうです。後に「雲雨」

とは男女の交わりを指すようになりました。

このストーリーの元は、屈原と並び称される楚の国の詩人宋玉の『高唐賦』に書かれていて非常に有名なのだそうです。二句目の「雲雨巫山むなしく断腸」とは、懐王は夢で一度

qing ping diao ci qi er 清平调词 其二

yī zhī hóng yàn lù níng xiāng
一枝浓艳露凝香

yún yǔ wū shān wǎng duàn cháng
云雨巫山枉断肠

jiè wèn hàn gōng shuí dé sì
借问汉宫谁得似

kě lián fēi yàn yī xīn zhuāng
可怜飞燕倚新妆

こうえんつゆかおり こ
一枝の紅艶露香を凝らす

うんう ふざんむな だんちよう
雲雨巫山枉しく断腸

しゃもん かんきやうたれ に え
借問す漢宮誰か似たるを得ん

かれん ひえんしんしやう よ
可憐の飛燕新粧に倚る

逢えたきりで、後はただ懐王を苦しめただけだったのに、楊貴妃は実在して、皇帝の側に仕えているのだから、玄宗皇帝がいかにか幸せであるか。また「可憐の飛燕新粧に倚る」とは、どの女性が楊貴妃と比べられるかということ、漢王朝の後宮随一の美人とされる、あの可憐なる趙飛燕^{ちゆうひえん}³⁾だけだ。しかも、それは化粧をしたての趙飛燕であって、そのまま美しい楊貴妃とは比べ物にならない。これも相当なゴマスリの詩で、玄宗皇帝を大いに喜ばせたのですが、しかし、ゴマの擦り方に工夫が足りなかったのか、後に讒言の材料になってしまったのでした。

それというのも、李白の横柄な態度に恨みを抱いていた高力士という宦官に言い掛かりを付けられたのです。「天下の美人楊貴妃様を、あの庶民出身で、最後は不幸な死に方をした趙飛燕が如きと同列に並べるとは、何事か」と。確かに趙飛燕は美しいとはいえ賤しい身分の出で、寵愛を受けた成帝の死後は庶民に身分を落とされたうえ、自殺したという不幸な生涯を持つ女性でした。

高力士の言葉に煽られて、楊貴妃まで李白を嫌うようになってしまったので、玄宗皇帝はやむなく李白に盛り沢山の財貨を持たせて追放したのだそうです。但し、李白追放の理由については諸説あり、必ずしも一定しているわけではありません。

この十数年後、安祿山の乱により、玄宗皇帝にも失意の時が訪れます。永遠を誓った楊貴妃との恋も、楊貴妃の死とともに尽き果てます。歴史の荒波の中で、このひと時の栄華を詠った詩は、詩の内容そのものよりも「その時」を取り巻く人物たちの人生の一部を鮮やかに切り取ったもの……そういう感じがします。写真や画像は歴史の一瞬を捉える芸術と言えますが、詩もそうだなあ、と改めて感じました。

「華々しいデビュー作が失脚の原因にもなったんですねえ。ま、人間、さえないままでもいいから、じっくり長生きした方が良いんですかねー」とい

う植田先生のコメントに一同失笑。確かに、一気に人気絶頂に上り詰めたあと大転落するよりは、そんなジェットコースターのような世界とは一線を画して、ゆったりと自分の世界を楽しんでいくのも一つの生き方ですよ。しかし李白は追放された後も次々と名作を残していきます。今日愛読されている作品の多くは追放後のものです。さすが天才李白ですね。

この後は中国語で朗読の練習をしましたが、音読することで、詩とは「リズム」であることを参加者全員で体感しました。

漢詩を日本語の書き下し文にしたとたん、原詩のもつリズムと味わいが異なってしまいます。「日本古来のものと思われている3・3・7拍子も漢詩と共通しています。ひょっとしたらあのリズムは漢詩から来たのかもしれないね」と植田先生はおっしゃりながら3・3・7拍子のリズムで漢詩を読んでくださったのでびっくりしました。

詩はまさしくリズム。声に出して読んだとき、それは音の世界でもあります。強弱、高低、緩急。読み方によって詩全体のイメージも大きく変わります。読み手の気分によっても味わいが変わってきます。昨今、何もかもがデジタル化してしまい、五感で味わう機会が減っています。リズムに乗って声を出し、その音が身体のどこにどう反応するかを確かめながら、頭の中の空想の世界と重ね合わせていく……。漢詩の朗読会はある意味、人間らしい感覚を取り戻すととても贅沢な時間かもしれません。

■註

- 1) 群玉山：玉山とも言う。西王母の住む山
- 2) 瑤台：仙人の住むところ
- 3) 趙飛燕：中国前漢の成帝（在位前33～37）の皇后。庶民の出身。歌舞に巧みで、成帝の目に止り、女官となり、のち皇后となった。妹の昭儀（合徳）も召され、姉妹で成帝の寵を争ったという。平帝のとき、王莽の上奏で庶人に落され、自殺した。この姉妹を描いた『趙飛燕外伝』は六朝時代の小説で、日本の平安時代の宮廷女流文学者に広く読まれた。

第130話：息子の想像力

父親が、息子に字を教えていた。「天」という字を教える時、「天」の印象を深くしようと、息子に訊いた。

父親「君の頭の上には何があるかな？」

息子「髪の毛！」

父親「髪の毛の上には？」

息子「屋根！」

父親「屋根の上には？」

息子「瓦！」

父親は怒って、机を叩いて言った。

父親「バカモノ！その上には何があるかよく見てご覧！」

息子は驚いて、泣きながら言った。

息子「上には…、上には小鳥が飛んでいる……」



第131話：衆寡懸殊 (数の違いが甚だしいこと)

子供「お父さん、“衆寡懸殊”ってどういうこと？」

父親「中学生にもなって、こんなことも知らないのか！」

‘衆’というのは人が多いことだ。‘寡’というのは未亡人のことだ。‘懸’は首を吊って自殺することだ。‘衆寡懸殊’というのは、旧社会では、未亡人が非常に多く、彼女たちは貧しくて生活できず、首を吊って自殺するしかなかった、ということを表している。これからは、自分で辞典を調べなくてはいけないよ。手抜きはいかん！」

第132話：講演者

ある日、人々の尊敬を受けている先輩が、講師に招かれて、講演をすることになりました。その講演者は、壇上に立つと、開口一番、聴衆に話しかけました。

「皆さん、私が何を話しようとしているか、わかりますか？」

聴衆は声を揃えて答えました。

「知りません！」

講演者は、

「皆さんはご存知ない。皆さんが何もご存じないならば、私が何を話しても無駄でしょう」

と、演壇を降りて、帰ってしまいました。

次の日、講演者は又壇上から呼びかけました。

「皆さん、私が何を話する積りか、ご存知ですか？」

聴衆は、昨日に懲りて、皆で「知っています！」と答えました。すると講演者は、

「皆さんが私の話すことをご存知なら、これ以上私が

話す必要もないでしょう」

と、演壇を降りて帰ってしまいました。

この様子を見て、聴衆たちは相談しました。講演者に訊かれたら、半数が「知らない」と答え、残りの半数が「知っている」と答えることにしました。

三日目も講演者は、果たして聴衆に同じことを訊きました。聴衆が、打ち合わせた通りに答えると、講演者はにっこりして言いました。

「知っている人と、知らない人が混ざっているようですね。では、知っている人は、知らない人に教えてやってください」

言い終わると、手を振ってサッサと演壇を降り、胸を張って去って行きました。

初心者体験のお誘い【鶴川水墨画教室】

季節の花など水墨画で描いて楽しんでみましょう。体験参加1000円です。手ぶらで参加OK! 見学は無料です。気軽に教室を覗いて見よう!!



● 講師：満柏 (日中水墨協会・会長)

● 場所：鶴川市民センター
小田急線鶴川駅「北口」から徒歩3分
195-0062 町田市大蔵町 1981-4

※駐車場あります

● 曜日・時間
第2又は、第4月曜日
14:00~16:00

● 体験参加費：1000円
(見学無料/手ぶら参加可)

● 問合せ：☎042-735-6135(野島)

使用済み古切手と書き損じの葉書でご支援を!

日本スリランカ文化交流協会では、スリランカへの教育支援の為、古切手と書き損じ葉書を集めています。皆様からたくさんの切手をお届け頂き感謝しております。古切手は周囲を1cmほどを残して切り取り、ついで折に田井にお渡し下さい。

いつも‘わりい’会員の皆さん及び‘わりい’関係者の方々に古切手や古はがきの回収にご協力頂き有難うございます。お寄せいただいた古切手などはその都度整理し、ある程度まとまった時点で換金し、スリランカの貧しい家庭の子供たちの教育支援としております。今後ともご協力をよろしく願いたします。

日本スリランカ文化交流協会代表 為我井輝忠

文化庁芸術祭主催公演 **第73回アジアオーケストラウィーク2018** わかち合うシンフォニー!

アジア オーケストラ ウィーク (AOW) は、アジア太平洋地域から国々を代表するオーケストラを招き、演奏と共に各国それぞれの豊かで多様な文化と伝統を我が国へ伝える

- ▲ **会場：東京オペラシティコンサートホール** 東京都新宿区西新宿3-20-2京王新線「初台駅」東口 徒歩1分
- 10月5日(金) **群馬交響楽団(日本)**、指揮：大友直人 19:00開演
モーツァルト 交響曲第35番ハフナー、チャイコフスキー・幻想序曲「ロメオとジュリエット」シベリウス・交響曲第2番
- 10月6日(土) **フィリピン・フィルハーモニック管弦楽団**、指揮：福村芳一 14:00開演
ロッシーニ・歌劇セミラーミデ序曲、ロドリゴ・アランフェス協奏曲(ギター：荘村清志) ファリャ、バレエ音楽「三角帽子」
- 10月7日(日) **杭州フィルハーモニック管弦楽団(中国)**、指揮：楊洋 14:00開演
ワーグナー 歌劇リエンチ序曲、ツォ・チーピン ヴァイオリン協奏曲(ヴァイオリン：ニン・フェン)、マーラー 交響曲第5番
- S=3,100円 ペア券(S席2枚)=5,000円 A=2,060円 B=1,030円 (3公演セット券 S=7,000円A=5,000円)
(eチケット) <http://eplus.jp/sys/TIU14P002005009P0050001> 東京オペラシティチケットセンター ☎03-5353-9999 チケットぴあ ☎0570-02-9999
- **問合せ：日本オーケストラ連盟** ☎03-5610-7275 (平日：10:00～18:00)

日本と中国の漫画家、友情を結ぶ漫画作品100点、
家族、環境、笑いをテーマにユニークで風刺の効いた芸術展

日中友好漫画展

- **会場：中国文化センター**
〒105-0001 港区虎ノ門3-5-1 37森ビル1F
- **日時：2018年9月11日(火)～21日(金)**(土・日祝休館)
10:30～17:30 初日13:30～最終日13:00迄
- ◆ **トークイベント：9月11日(火) 13:30～15:00**
開幕式 15:30～
- ※ トークイベントと開幕式の詳細および申し込み方法は、中国文化センターHP (<https://ccctok.com/event>) をご覧ください。

江西省文化年

【景德鎮 高温顔色釉と青白磁展】

現在の景德鎮における最高レベルの高温顔色釉磁と青白磁作品38点を展示。「高温顔色釉磁」は景德鎮の伝統的四大名磁器の一つで、異なる金属酸化物を添加した異なる着色剤の釉薬を用いて色合いの異なる釉面を作り出す。

- **中国文化センター** 105-0001 港区虎ノ門3-5-137森ビル1F
 - 2018年9月26日(水)～10月5日(金)
時間10:30～17:30(土日休館)
 - ◆ **開幕公演「磁器楽器と演奏」**9月26日(水)15:00～
演奏：景德鎮学院学生磁器楽団
- 磁器で作られた打楽器、鼓、古箏、二胡、笛による中国の名曲を聴こう!
- **開幕公演申込み**：中国文化センターHP (<https://ccctok.com/event>)
 - **主催**：江西省文化庁 中国文化センター

平成30年度(第73回)文化庁芸術祭参加公演
第一回 小瀨明人 尺八リサイタル

▲ 特別出演=石川利光(尺八)

小瀨明人さんは'わんりい'ボイス・トレ講師Emmeさんのご夫君。古典や自作曲を中心としたソロ活動の他、民謡の伊藤多喜雄率いる『TAKIO BAND』等数々のグループに参加している。海外公演も多く、欧米・アジア・オセアニア・アフリカなど計35か国で演奏の国際派尺八奏者です。今回のリサイタルでは、古典本曲の世界をじっくりとお楽しみ頂けます。



- 2018年10月16日(火) 開場18:30 開演19:00
- MUSICASA(ムジカーザ) 渋谷区 代々木上原
<http://www.musicasa.co.jp/>
- 前売3,500円(当日4,000円)
- ◆ **問合せ**：オバマ ☎/FAX: 03-3867-8303

日中平和友好条約締結40周年記念
絆 張濱二胡演奏会 2018 東京公演

<https://ameblo.jp/zhangbin/entry-12393952865.html>
張濱(二胡) 張日妮(二胡) 姜小青(古箏) 南京芸術家代表团

- 9月16日(日) 14:00～
- **東京文化会館小ホール** 全席指定：6000円
- ◆ **チケット&問合せ**：052-763-1082(チャン・ビン音楽企画)

アジア・アカデミー賞 W受賞 他多数

映画 **妻の愛、娘の時** (2017年、中国・台湾120分)

<http://www.magichour.co.jp/souai/>
～アジアを代表する大女優シルヴィア・チャン監督主演～

母の死をみとったフィイン、母を父と同じ墓に入れる為、田舎にある父の墓を移そうとするが…。誰にでも訪れる家族の問題に笑い、泣き、感動する。ヒロインの夫役を中国映画界の巨匠・田壮壮監督が演じる。

- **劇場情報**
YEBISU GARDEN CINEMA 0570-783-715 9月1日(土)から
MOVIX 昭島 050-6861-0325 10月12日(金)から
川崎市アートセンター 044-955-0107 10月13日(土)から
ほか

日中平和友好条約 40 周年 **チャイナフェスティバル 2018 in 代々木公園**

参加無料

絶品グルメから伝統芸能まで、中国の魅力がたっぷり詰まった 2 日間。

中国を体感する日本国内最大級の交流の祭典として、日常味わえない数々の中国芸能、芸術、食、観光資源、経済、パフォーマンスなど、様々なシーンの中国文化を紹介すると共に営業許可を持つ中華料理店、及び中国に関する商品を取り扱っている店舗・企業、自治体・団体等、併せて 100 団体が出展！

【メインステージ出演アーティスト】

マル キョウ ロン モンロウ
 圈 九 / 龍 夢柔 / サンブラザ中野くん & パッパラー河合 / 中西圭三 / 蘭 華 / ウエイウェイ・ウー (二胡) / 程 璧
 / ミシェル・ヤン / 吉普賽女郎 (GYPSY QUEEN)

■特別招聘・蘭州歌舞劇院による **「中国芸術団来日公演」** 【司会】 萩本舞 / 小松拓也 / ミシェル・ヤン

●場所：代々木公園イベント広場 明治神宮前〈原宿〉駅／原宿駅／代々木八幡駅／代々木公園駅

●会期：9月8日(土)～9日(日) 10:00～20:00

▲開会式8日(土) 11:00～ ※雨天決行 荒天中止 問合せ：info@chinafes.net

●主催：チャイナフェスティバル 2018 実行委員会 駐日中華人民共和国大使館
 実行委員長 程永華 (中華人民共和国駐日本国特命全権大使)
 最高顧問 福田康夫 (元内閣総理大臣)、事務総長 青柳陽一郎 (衆議院議員)



第 28 回中国文化之日 海派印象「上海歌劇院舞劇団 ダンスガラ特別公演」&「上海現代油絵精品展」

公演：**海派印象～上海歌劇院舞劇団 ダンスガラ特別公演** (上演時間約 60 分)

Shanghai Opera House Dance Gala Special Stage

「海派」の表現者として半世紀以上活躍する、上海歌劇院舞劇団のトップダンサー 12 名が来日。中国民族舞踊や古典舞踊、現代バレエ、コンテンポラリーダンスなどを融合させたオリジナリティ溢れる多様なダンスを披露します！

●日時：10月5日(金) 19:00～/6日(土) 11:00～及び 17:00～/7日(日) 11:00～ 全4公演

●会場：牛込笹塚区民ホール

(東京都新宿区笹塚町 15 番地)

http://www.shinjuku.hall-info.jp/pc/event_ushigometansu.html

入場券：全席指定、前売り 1,000 円
 (空席があれば当日券 1,200 円) 前売り開始中

▲ 3 歳未満の入場はご遠慮下さい。

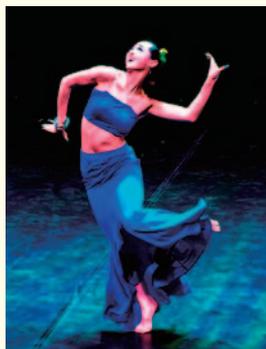
● チケット取扱い：

① 日中友好会館文化事業部窓口
 (9 時～ 17 時 平日のみ)

② 「e+イープラス」

③ ファミリーマートのチケット購入機

▲ 「かいはいんしょう」で検索ください。



贛哈



潯陽遺韻

上海現代油絵精品展 無料

～Exhibition of Shanghai Contemporary Oil Paintings～

上海で活躍の 7 名の作家が色彩豊かな都市の雰囲気が溢れる油絵を紹介。本展の為の特別制作作品も展示する。

● 会期：9月28日(水)～10月20日(土)

10:00～17:00 (日曜休館但し、10月6日(土)は休館)

● 展覧会関連イベント

I) 講演会「海派スタイルについて」9月28日(金) 14時～(約60分) ▲講師：王超鷹 (文化学者・伝統工芸士) ▲会場：日中友好会館大ホール海派とは、「上海らしさ」を表す言葉です。その海派スタイルについて、文化学者であり、アリババグループをはじめとする数々の中国有名企業のロゴデザインを担当した王超鷹さんが日本語でわかりやすく話す。

* 事前申込不要参加無料



夏予冰「スカイライン」

II) 「文の京コミュニティコンサート」 (公財) 文京アカデミー主催、10月17日(水) 14時～(50分程度) ▲出演：「うたり」打楽器奏者、藤井はるかと藤井里佳の姉妹によるパーカッションデュオによる演奏です。座席(50席：応募者多数の場合は抽選) 希望者は、往復はがきで、参加者の郵便番号・住所・氏名・電話番号を記入し、「日中友好会館文化事業部 ミュージアムコンサート係」宛に申込む。はがき 1 枚につき 2 人まで応募可能。締め切りは、9月28日(金) 必着。立ち見は申込みの必要なし。

◆ 公演・展覧会の問合せ・申込み：日中友好会館文化事業部 東京都文京区後楽 1-5-3 ☎ 03-3815-5085

【わんりい料理講座】

インドネシアのココナッツカレーはミネラルたっぷり!!

● 2018年9月25日(火) 11:00～14:00 ● 参加費 1500円

● 麻生市民館・料理室 (小田急線新百合ヶ丘駅北口3分)

● 講師: ロサリタ (ジャカルタ出身) 定員: 15名

◆ 申込みと問合せ: 'わんりい' ☎ 042-734-5100

E-Mail: wanli@jcom.home.ne.jp

■メニュー

1) ココナッツ味が美味しい **インドネシアのチキンカレー**

2) **レンベル・アヤム** (軽食にもなるバナナの葉でつつんだインドネシア風チマキ)

3) インドネシアのデザート & グリーンサラダ 他

*参加される方は、エプロン、筆記用具、布巾をお持ちください



レンベル・アヤム

▲ココナッツミルクのこと

ココナッツミルクの栄養成分は、カリウム、マグネシウム、鉄分などのミネラルが豊富です。カリウムには体内の余分な塩分を排出してむくみを抑えます。鉄分は貧血予防、マグネシウムは、筋肉疲労をやわらげる効果があります。また、食物繊維も豊富なので、便秘症の人の味方であり、貧血予防に効く葉酸なども含まれています。

次回・次々回料理講座「山西省の粉料理」予定

● 10月23日(火) 11:00～14:00

場所: 町田中央公民館・調理室

● 11月15日(木) 11:00～14:00

場所: 麻生市民館・料理室

参加費: 1,500円 講師: 吳躍鳳(遼寧省出身)

中国東北部ではいろいろな穀物の粉を使った料理が豊富です。昨年皆さんにご紹介した燕麦の粉もその一つですが、今回は、エンドウの粉、トウモロコシの粉、そば粉、高粱の粉など2回シリーズで、イエリンさんのお母さんでいらっしゃる吳躍鳳さんにご指導いただきます。詳しい案内は、10月号の'わんりい'でお知らせします。



日中平和友好条約締結40周年記念 女子十二楽坊 日本公演2018

▲詳細は、<http://kusi.co.jp/lp/> で検索

ゲスト: 川井郁子(ヴァイオリニスト/作曲家)

司会: 朝岡聡(フリーアナウンサー)

●新宿文化センター 大ホール

<https://www.regasu-shinjuku.or.jp/bunka-center/>

新宿区新宿6-14-1 ☎03-3350-1141

●日時: 11月27日(火)/11月30日(金) 18:30 開演

●チケット: SS 9500円 S 8500円 A 7500円

チケット購入: イープラス <http://eplusu.jp> 他

◆主催: 華宇創意株式会社

北京石楽皓風文化传播有限公司

【'わんりい'の原稿を募集しています】

'わんりい'は、2月と8月を除く毎月発行の当会の会報です。主として、会員と会の関係者の皆さんの原稿でまとめられています。海外旅行で体験された楽しい話、アジア各地の情報やアジア各地で見聞した面白い話、これはと思うイベント情報などを気軽に寄せて下さい。



日中文化交流市民サークル 'わんりい' カット/サミラ シェバ

'わんりい' 236号の主な目次

「寺子屋・四字成語」(15)礼尚往来(礼は往来を尚ぶ)...	2
論語断片(39)「无所取材」(材を取る所無し).....	3
五都市(上海・南通・揚州・鎮江・無錫)周遊(1).....	4
混迷の時代を拓くザメンホフの人類人主義(26)...	6
混迷の時代を拓くザメンホフの人類人主義(27)...	8
東西文明の比較(27)「隋・唐と日本」(おさらい)...	10
雨のソウル旅行・㊦.....	12
海外出張の思い出・旧ソ連㊧.....	14
「漢詩の会」23『清平調詞』其一、同其二.....	16
中国の笑い話.....	19
'わんりい'掲示板.....	13・20・21・22

※【9月定例会開催日及び10月号'わんりい'発送予定】
「中国語で読む漢詩の会」「ボイストレの会」9月・10月の予定日及び会場は13ページに掲載してあります。